

映像がとらえた民族舞踊

牛山 純一

ジャン・ルーシュ氏によるドゴン族の7年間にわたる記録を紹介して、舞踊の研究のためにいかに映像による記録が重要かを語った。

ルーシュがシギのフィルムに関わるようになったのは、ソルボンヌ大学での師であったマルセル・グリオールの影響が大きい。それまでの映画理論は捨て、できるだけ長いシークエンスでカットせずに撮るという方法を編み出した。ルーシュは7年間のシギ記録を続けることになった。

3年目のシギはボンゴ村で行われ、この時初めて、それまで毎年「死の儀式」の一部が演じられていたことが解った。グリオールのインフォーマットであったサンガ村のアマディニ老に会って情報を得たことが助けになった。シギはドゴン族の始祖のディオングセルが死に、その死を葬うために行っている儀式で、1年目は死んだ時点、2年目は喪の一部が明けて踊りを踊る。3年目は完全に喪が明け、初めて仮面が現れる。仮面は死んだ祖先を表し、洞窟の入口に木製の蛇を経てかけるのは、祖先が生きかえったしるしなのである。

4年目は「アマニのシギ」と呼ばれ、言葉のシギだった。儀式用の言葉を発する専門家が出て、一連の言葉を発するのだが、内容は始原神話に関するものようで、重要に思われたので翻訳を試みた。アマディニ老をパリに招いて、1か月半ほどをテキストの解説に費やした。

ここで判ったのは、「言葉のシギ」は「生殖のシギ」であることで、翌年、つまり5年目のシギでは男たちが砂丘に一晩埋まり、翌朝現れて誕生を象徴し、6年目のシギでは、男たちが女装をし、「育児のシギ」を演じた。7年目のシギの行われるソング村には割礼の洞窟があり、少年はそこで割礼を受けて大人になる筈だったが、干ばつなどの理由で撮影することはできなかった。

撮影の過程で、グリオールも把握していなかった事実をつかむことができた。つまり毎年のシギはある特定のテーマを扱っていて、ひとつの村が自分たちのシギを終わると、次の物語を次の村に託するというシステムになっていることだ。

撮影対象にフィルムを見せてフィード・バックしたのは1969年のボンゴ村が最初だったが、7年間のシギの集大成を見せることで、ドゴン族自身に「シギとはどういうものか」を発見した。彼らにしても現実のシギは2年か3年見るのがせいぜい

で、7年通して見ることはない。またフィルムによって4つの村を初めて一望の下に俯瞰し、まさに彼らの観念にある通り、再生する蛇の背骨を表象していることを確認し、「こんな美しい調和があるとは思わなかった」という感想を述べた。

村での上映の際に、ディーテルラン女史が「これからシギはどうなるのか」といった類いの質問をすると、古老は「これからのことの返事をうるには次のシギを待たねばならない」と答えた。次のシギは2027年からだから、ルーシュも古老も生きてはいない。しかし、古老は平然として「おまえはグリオールの息子だろう。おまえの息子たちと私の息子たちが協同して、次のシギを見たいのではないか」といった。「撮る者と撮られる者」といったありふれた関係を超えた、ある種の深い共犯関係を感じさせるひと言である。

精密科学では、ある結果が確認されるには最低4回の実験が必要とされる。これに倣って、シギも4回見ようということになり、通算240年かかる計画を国立科学研究所センターに提出した。突飛な考えとは思われたが、完全な拒否にも会わなかった。そこでマリ人を数人募って映画人にするため教育を始めているという。まことに壮大な計画である。

ルーシュは講演をグリオールの言葉でしめくくった。「民俗学を志す者は信ずべきことがある。つまり、他人が信じている事象を信じるのではなく、他人が信じているというその事実を信じていなければならない。」ルーシュはそれがまさに民俗学の鍵なのではないかと語った。

「舞踊学会」用のビデオ時間表

〈世界の8民俗〉

成人式

「カツオ漁成人式 ソロモン・ウラワ島」

恋愛と結婚

「若い男女の集い 雲南・アシ跳目」

「ヤム芋を贈るとき 女の島トロブリアンド」

生業

「稲刈りの休み バリ島のケチャ」

「ラフを刈るとき エチオピア・ガラ族」

宗教

「コウモリをまつるアマゾン・カマコラ族」

病氣払い

「病人の治療 カラハリのブッシュマン」

葬祭「祖先をまつるドクドクの仮面」

〈ドゴン族〉

「1967年 1年目のシギ ユゴドゴ村」

「1968年 2年目のシギ ティヨグ村」

「1969年 3年目のシギ ボンゴ村」

「1970年 4年目のシギ アマニ村」

「1971年 5年目のシギ イディエリ村」

「1972年 6年目のシギ イアメ村」